

道化の言葉

— *Twelfth Night* の Feste の場合 —

西野義彰

演劇における道化の言葉というのはどのようなものか。そもそも道化特有の言葉というものがあるのだろうか。あるにしても、それが主人公を始め他の登場人物の言葉とどの点で異なっているのか。David Wiles によると、古典劇の奴隷が仮面によって区別されたが、エリザベス朝のクラウン（道化）は彼の話し言葉により区別されたということである。¹ ただ、Shakespeare の場合、一口に道化といっても、*Twelfth Night* の Feste のような、道化服を着た非常に機知に富む賢明な宮廷道化（あるいは職業道化）から、道化服は着ていないが機知が豊かで頭の回転が速い、ほら吹きの大漢 Sir John Falstaff (*Henry IV, 1&2*)、さらに召使い、田舎者、巡査など小さなカテゴリーに属し、言葉の誤用を始め愚かしくて滑稽な言動により観客を楽しませる笑いの対象としての人物たち、*Hamlet* に登場し、主人公と対等に渡り合い、相手をやりこめるほど口の達者な墓掘りや *Macbeth* の門番など、出番は少ないが劇の転回点に登場する他の職業の人物たちまで、さまざまである。彼らをいくつかのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーの主な人物に注目して彼らの台詞を分析するにしても、そこから道化の言葉全体にあてはまる結論を導き出すことは容易ではない。筆者には言語学的な分析は不可能なので、筆者なりに劇の展開にそって道化の台詞、文体や技巧などに注目し、他の登場人物の台詞や文体にも適宜言及しつつ、道化 Feste の言葉について考察してみたい。

登場人物一覧で Feste は Olivia の jester（お抱えの道化師）² として紹介されていて、彼が最初に登場するのは 1 幕 5 場である。道化はしばらく無断で外出し Maria からその点を非難されるが、彼は持ち前の機知で巧みに対応する。職業道化の主要な仕事は主人（や周囲の者）に対して娯楽を提供することで、彼はその点を良く心得ていて、後で Viola を驚かすように、その仕事を遂行できる十分な能力を持っている。彼の得意とするものに言葉遊び、特に洒落があり、Maria との短い対話の中でも何度か洒落を言っている。彼女から、留守にした理由を戦争への参加にしてはどうかと冗談半分に提案されると、道化は次のように言う。

Well, God give them wisdom that have it; and those that are fools, let them use their talents. (1.5.14-15)

ここで道化は 'fools' に文字通りの「阿呆」と 'fowls' (鳥類), 'talents' に「才能」と 'talons' (かぎづめ) の意味をかけて洒落を言っている。³ 留守にした罰として縛り首にされる (hang) と脅されると、道化は "Many a good hanging prevents a bad marriage:" (19) と言ってうまく切り返す。Maria が退場し、Olivia が従者の Malvolio たちと入ってきて道化と対話する場面は、賢明な道化が本領を発揮する絶好の機会になる。道化は世間の賢者はともすると愚者であり、知恵のない自分が賢者として通るかもしれないという。そうであれば "Better a witty fool than a foolish wit." (34) (馬鹿な賢者よりは賢い阿呆の方がましだ) ということになる。これは撞着語法を用いた対照的な表現を中心として、簡潔で凝縮された言葉遣いになっている。主人の Olivia が阿呆を連れて行くよう従者に言うと、道化は彼女こそ阿呆だから連れて行けとやり返す。さらに道化は "The hood makes not the monk" (彼流に言うと "I wear not motley in my brain") という意味のラテン語の諺を引用し、⁴ Olivia が阿呆であることを証明する。なぜならば、最近他界した兄の魂は地獄ではなく天国に行ったのに、Olivia がいつまでも嘆き悲しんでいるからだという。これは道化のへりくつと言えるが、彼がしていることは主人の Olivia を社会の底辺にいる道化のレベルまで引き下げることである。それを聞いていた Malvolio は道化に厳しいが、Olivia は「全てを許された道化」(an allowed fool, 1.5.93) は口こそ悪いが悪意はないと弁護する。

1 幕 5 場で、Viola が Orsino 公爵の使者 Cesario として Olivia 邸に来ると、彼女に散文で話しかける。Brian Vickers はこの劇の散文について、それは主に社会の低い階級及び召使いや扶養されている人と接する時の上流階級の代表者に与えられているが、Viola の場合、それは時々彼女の変装と関連し、散文の場面の終わり方で一人になると、彼女は自然と独白のためにより高い威厳のある韻文へ上昇すると述べている。⁵ 171行目からの "Most radiant, exquisite, and unmatchable beauty—I pray you tell me if this be the lady of the house,..." という表現は、誇張的で気取った言葉遣いになっているが、Elizabeth M. Yearling は Viola の言語に関して「その多く、特に Olivia に対する言語は、気

取っていて宮廷的で人工的であり、我々が Shakespeare のヒロインに期待する文体ではない。(中略) 彼女は文体を相手に合わせる言葉のカメレオンであり、彼女の語彙は宮廷的なお世辞から粗野な用語にまで及んでいる」と述べている。⁶ ここで Viola は 'speech' (台詞)、'penned' (慎重に書いた)、'con' (暗記する) など芝居のイメージ (暗喩) を用いて、自分が未熟で使者として相応しくないことを伝える。皮肉なことに、彼女は公爵に恋心を抱きながら、男装して仕えているために告白できず、主人に代わって偽りの姿で Olivia を口説くという不本意な役柄を演じ続ける。Olivia は主人として威厳と風格を漂わせる落ち着いた言葉で、相手に合わせて散文を話すが、Olivia がベールを取って顔を見せると、Viola の台詞はブランク・ヴァースに切り替わる (242ff.)。Viola は相手の美しさを讃えながらも毅然として、時に横柄な態度で詩的なイメージや表現を用いて説得する。Olivia も文体を散文からブランク・ヴァースに切り替えるが、それは Viola をからかう気持ちから真面目に対応しようとする内的な変化と関連しているように思われる。こびることなく、言いたいことを率直に述べる若いハンサムな青年が退場すると、Olivia はたちまち恋に落ち、独白において青年に対する恋を告白する。

主人公の Viola は、外見のみならず内的にも美しい素直な女性として登場し、彼女の言葉は状況によって変化するが、本質的には女性らしい洗練されたものになっている。(好例として、2幕2場11行目からの複雑でやっかいな恋愛関係に関する独白を挙げることができる。そこでは彼女の本音や性格が最も明確に現われている。) それに比べて脇筋の Sir Toby や Sir Andrew らを中心とする人物たちは、概して、祝祭的な雰囲気の中で脇役らしい猥雑な口語的散文⁷を話し、彼らの言語は粗野で下品と言うべき様々な表現 (酒、遊び、踊り、罵声など) に満ちている。脇筋の代表的な人物 Sir Toby は、*Henry IV, 1&2* に登場する、ユーモアと脂肪のかたまりというべき巨漢 Sir John Falstaff をかなり縮小したような人物で、機知も少なからずあり冗談や娯楽において率先するタイプで、道化から「見事なおどけぶり」(admirable fooling, 2.3.81) と褒められることもある。Sir Andrew は典型的な阿呆と言うべき人物で、求愛のため Olivia 邸にやっかいになっていて Sir Toby の思い通りにあしらわれている。彼の言動は実に滑稽で、人が使った印象的な言葉を借用したり、馬鹿げたことを真面目に話したり、愚かしい決闘の挑戦状を真剣に書くが、自分の愚かさにはあまり気づいていない愛すべき人物である。⁸ 従って彼の言語は、言葉の誤

用 (incarnate のつもりで incardinate, 5.1.179-80) を始めとして彼の性格や愚かさを示す表現に満ちている。他方、執事の Malvolio に関しては、Maria によって彼の本質が見事に浮き彫りにされている。

The devil a Puritan that he is, or anything constantly, but a time-pleaser, an affectioned ass, that cons state without book, and utters it by great swarths: the best persuaded of himself,...: and on that vice in him will my revenge find notable cause to work. (2.3.146-53)

Malvolio は決してピューリタンではなく、日和見主義者で気取った愚か者、「高い地位に相応しい表現を暗記し、それらを過度に使う」⁹うぬぼれ屋であるという。彼女が復讐したいのは彼のそのような悪徳に対してである。Maria は Olivia に仕える侍女で、教養があり利口な女性で、上の引用からも分かるように、散文による小気味よい、テンポの速い言葉遣いが特徴といえる。他方、Malvolio は上述のような人物で、執事という立場を笠に着て Sir Toby を始め周囲の者に対して尊大で横柄、自分に対するうぬぼれが強く身分以上の言葉を使う傾向がある。また、「彼の口は Orsino の詩や Sir Toby の口語的表現などが無い、おおげさな語句と長い言葉に満ちていて、(中略) 彼の文体は名詞を多用したものである。」¹⁰ 従って、彼の場合は、うぬぼれと傲慢さが前面に出た散文が特徴と言える。概して、Orsino の宮廷は高尚で、しばしば仰々しい詩で話す、Olivia 邸の者は主として散文で話す¹¹とすることができる。

道化は公爵に呼ばれて前日と同じ失恋の歌を歌い、公爵から 'pay thy pleasure'(2.4.69) といってチップを渡されると、道化はその言葉をひねって 'pleasure will be paid, one time or another' (快樂はときに痛い目に遭います) と格言のような、相手が予期しないことを言う。さらに、心が気まぐれな公爵に憂鬱の神のご加護があることを祈ったり、仕立屋には 'doublet of changeable taffeta' (光で色が変わるシルクのダブルレット) を作らせると良いと、いかにも道化らしい言葉を語って立ち去る。この後、公爵と Viola の間で男女の愛について意見が交わされるが、ここも注目に値する場面の一つである。公爵は、Olivia への愛は女性が抱く愛とは比較できないほど大きく深遠であると主張するが、Viola は父の娘という微妙な例を引き合いに出し、彼女はある男性にそれに劣らないほどの深くて純粋な愛を抱いていると反論する。現在も彼女はそ

のことを相手に打ち明けず、忍耐強く耐えているという。

... she never told her love,
 But let concealment like a worm i' th' bud
 Feed on her damask cheek: she pin'd in thought,
 And with a green and yellow melancholy
 She sat like Patience on a monument,
 Smiling at grief. Was not this love indeed? (2.4.111-16)

Viola のこの台詞は「つぼみの中の害虫のように」、「墓石の上の忍耐の像のように」という直喩を始め、"let concealment like a worm i' th' bud /Feed on her damask cheek", 'a green and yellow melancholy', 'Smiling at grief' などの詩的な表現を駆使し、ブランク・ヴァースによる非常に引き締まった印象的な台詞になっている。

3幕1場で Viola と対話するとき、Feste は再び賢明な道化としてその才能をいかんなく発揮している。笛と小太鼓を持った道化を見て Viola が「小太鼓で生計を立てているのか」(live by thy tabor) と尋ねると、道化は「教会のそばに住んでいる」(live by the church)、つまり、家が教会のそばにあるのだと相手の言葉をひねって答える。Viola も負けずにやり返し、言葉を巧妙にもてあそぶ者はすぐにそれを「あいまいに」(wanton) するというと、道化はかさず「妹に名前がなければ良かった」、なぜなら彼女の名前は言葉であり、それをもてあそぶと妹を「ふしだら」(wanton) にするかもしれないという。さらに、言葉は最近悪党になって全く信用できないので、言葉でまともなことを話す気になれないと懐疑的な見解をほのめかす。Viola が君は陽気な人だから「何も気に病むことはない」(car'st for nothing) だろうという、道化はチップを仄めかして "I do care for something" と切り返し、'care for' に「気にかかる、欲しい」など複数の意味を込めて洒落を言う。また、道化は Olivia の 'fool' かと聞かれると、主人には阿呆など一人もいない、少なくとも結婚するまで阿呆をそばに置くことはない、'fool' に「不義をされた夫」の意味を込めて鮮やかに切り返し、道化は主人の阿呆ではなくて「言葉の遊び人」(corrupter of words)¹²であると説明する。この言葉で道化が意味しているのは、「自分は言葉をもてあそぶ者であり、職業柄どうしても洒落や他の手段で言葉と戯れたく

なる。そこには相手の意表をついて困惑させる言葉のゲームがあり、真面目に理解しようとする相手をはぐらかし、ほくそ笑む意地の悪さがある。従って、道化を相手にするときは注意召されよ」ということであろうか。いずれにせよ、彼の言葉はしばしば当てにならず、全面的に信用することはできないという事が含意されている。Viola が最近道化を公爵邸で見かけたと言うと、彼は

Foolery, sir, does walk about the orb like the sun, it shines everywhere.
(39-40)

と言って、人間の愚かさは太陽と同じく地球を歩き回り、愚の体現者である道化がどこに姿を見せようと何ら不思議はないと見事な説明をする。Viola がチップとしてコインを一枚渡すと、ギリシア神話の Troilus と Cressida を引き合わせた Pandarus の話を持ち出して、巧妙にコインをもう 1 枚手に入れる。道化が退場した後の Viola の次の独白 "This fellow is wise enough to play the fool, /And to do that well, craves a kind of wit..."(3.1.61-67) は、Feste の本質を言い当てている。彼は誰が相手であれ、出方にあわせて臨機応変の見事な道化ぶりを見せるが、それは彼の機知、相手が予期しない形の洒落や言葉遊びだけでなく、幅広い教養（神話、ことわざ、格言、当時の流行歌、パロディ、アイロニー等の技巧）をも駆使できることによる。

その後の Olivia による Viola への愛の告白、後者の複雑な胸の内を語る台詞、特に 3 幕 1 場 149 行目以降は、いずれもカプレット形式による詩的で技巧的なものになっている。それに対して 3 幕 2 場の Sir Toby や Sir Andrew たちの猥雑で粗野な口語的散文は、Olivia たちの洗練された文体とは際だって対照的である。Olivia への求愛をあきらめ帰国しようとする Sir Andrew をなだめて Viola との決闘をそそのかす場面で、Sir Toby の台詞 (40-8) は洒落や冗談を含めて彼らしさを十分発揮している。例えば、彼が "If thou thou'st him some thrice...and, as many lies as will lie in thy sheet of paper, although the sheet were big enough for the bed of Ware in England(43-46)" とか、'write with a goose-pen' と言うとき、彼は機知を効かせて主格の 'thou' を動詞で用いたり、'lie' を「嘘」、「横たわる」、'sheet' を「紙」、「シーツ」の二つの意味で用いたり、'a goose-pen' に文字どおりの「ガチョウの羽で作ったペン」と「阿呆のペン」という意味を含めて滑稽にからかっている。Elizabeth M. Yearling は、彼も「時々

長い言葉を発明し、(中略) 頭韻を踏む名詞を対に置くのが好きである。(中略) フォーマルな2人称の 'you' より 'thou' をこの劇で最も用いる人物である」と言っている。¹³ 酒飲みの Toby が時々難しい多音節の語を使うのは、彼の性格だけでなく酒の影響と関係があるのかもしれない。

Feste らしさは、4幕2場の Malvolio いじめでガウンとひげを付けて牧師の Sir Topas に変装し、そこで中心的に彼をからかう時にも十分発揮される。Sir Toby に Master Parson と呼びかけられると、道化は牧師らしい言葉遣いになり次のように言う。

*Bonos dies*¹⁴, Sir Toby: for as the old hermit of Prague, that never saw pen and ink, very wittily said to a niece of King Gorboduc, 'That that is, is': so I, being Master Parson, am Master Parson; for what is 'that' but 'that'? and 'is' but 'is'? (13-17)

ここでは全体的に哲学的で学者ぶった表現や内容が目立ち、ラテン語の使用、イギリス史の想像上の人物への言及、後半の難しそうなる表現などは一見もっともらしく思えるが、それらはおどけやはったり、まがいの論理によるナンセンスであって実に滑稽である。¹⁵ その後も道化と牧師を器用に演じ分けて Malvolio をからかうが、最終的には彼の願いを聞き入れ、ヴァイスや悪魔への言及がある古い歌を歌いながら退場する。Bente A. Videbæk は Feste について、「他の Shakespeare のクラウンよりも全くのナンセンスと呼べるものを用いる。(中略) 彼は精を出して求め、言葉の意味をひねり、劇の主人公たちの正体を暴くためにそれらを用いる」と述べている。¹⁶

5幕1場冒頭の公爵との対話においても、Feste らしさが発揮されている。Olivia 邸にやってきた公爵に元気が尋ねられると、道化は敵のおかげで良くなり、友のおかげで悪くなると意外な返事をする。公爵が逆ではないのかと言うと、道化は "Marry, sir, they praise me, and make an ass of me. Now my foes tell me plainly I am an ass: so that by my foes, sir, I profit in the knowledge of myself, and by my friends I am abused." (16-19) と答える。感心して公爵がチップの金貨を1枚渡すと、道化は 'double-dealing' に「2枚舌」と「2度渡すこと」という2重の意味¹⁷を込めて巧妙に金貨をもう一枚ねだる。それがうまく行くと、道化は調子に乗って古い諺 "The third pays for all" (3度目の試み

は幸運である)に言及したり、'the triplex' (3拍子)は軽やかで活発なダンスにもってこいだと言ったり、教会の鐘が1, 2, 3回鳴るなど、3の数字を強調して巧みに3枚目の金貨をねだる。公爵がOliviaを呼んでくれれば「もう1枚与えるかもしれない」(it may awake my bounty further.)と言えば、道化は'awake'という言葉をつまえて、'lullaby to your bounty' (あなたの寛大さにお休み)とか、"let your bounty take a nap" (あなたの寛大さにうたた寝をさせる)、"I will awake it anon." (私がすぐにそれを目覚めさせる)など、機知に富んだあざやかな話術を披露して退場する。

それまで消極的で自ら動くことの無かった公爵が、直接口説くためにOlivia邸にやって来る。しかし、自分の愛が受け入れられないのはViolaが原因だと悟り、殺意に近い憤りを吐露するとき、彼は直喩、他の視覚的イメージ、多音節語、合成語、倒置法を含む詩的な技巧や表現を駆使し、迫力のあるブランク・ヴァースを語る(5.1.115-29)。Elizabeth M. Yearlingによると、「新しい語はOrsinoの語彙ではふつうであり、特に接尾辞で終わる複数の音節の語はそうである。彼の統語法は適切であり、口語的で簡単な話し言葉はほとんど用いない」¹⁸ことが特徴といえる。公爵の言葉を聞いていたViolaは自分への殺意を覚悟の上で、深く純粋な愛を抱く女性らしく、単音節語が中心の素直なブランク・ヴァースで応える。3角関係の緊張がピークにさしかかったとき、ケガをしたSir Andrewたちが駆け込み、さらにViolaの兄Sebastianが登場することで、双子の兄妹が感動的な再会をはたし、人違いによって混乱を招いた事態が一挙に喜劇的な解決に向かう。

劇が終わると道化がただ一人舞台に残り、エピローグとして一見たわいない歌を歌う。それは5連からなっていて、各連の2, 4行目は最終連の4行目を除いて繰り返され、1, 3行目が意味を伝える。第1連は「おれ」が幼い子供の頃、自分のいたずらが大人に見られたこと、第2連は「おれ」が大人になると、ごろつきや泥棒に人々は門を閉ざしたこと、第3連は「おれ」が妻をめとるとき、ほらを吹いてもうまく行かなかったこと、第4連は「おれ」が寝床に就くときは、大酒飲みと同様、いつも酔っぱらっていたこと、第5連ははるか昔この世は始まったが、それはともかく我らの芝居は終わり、我々は日々皆さんを楽しませよう努めるという内容である。リフレインにおける風と雨の繰り返しは、寂しさやわびしさを強調し、それが歌全体を暗くて陰鬱な雰囲気になっている。直前までに道化が見せた機知に富む見事な当意即妙や道化ぶりは、

ここでは全く見られない。子供の頃から成人（又は老年）まで行った数々の愚行や自堕落な生き方を反省するかのように、あるいは、もはや取り返しのない過ぎ去った過去をむなしく回顧し、呆然と風雨の中に立ちつくす「おれ」の姿が見て取れる。その意識は一瞬この世の始まりに向けられるが、すぐさま終わったばかりの劇に戻り、役者として観客を楽しませるよう精進する旨を伝えて退場する。ここでの Feste は賢い道化としての役割を終え、ロマンチックな主筋と笑劇的な脇筋が見事に調和した楽しい喜劇を見終えたばかりの観客を、風雨が容赦なく吹き付ける厳しい現実の世界へやさしく導く案内役として立っている。この歌と調べはおそらく当時の観客におなじみのもので、その内容はそれまでの様々な外来語、聞き慣れない言葉や詩的な表現に満ちた劇世界とはうってかわり、たわいない単純なものに見える。そこには単調で悲しげな調べ、自然の冷酷さと人生のわびしさを強調するようなイメージにより、知性ではなく感性に穏やかに訴えるものがある。

道化 Feste の言葉について結論を述べる必要がある。道化を含めて全ての登場人物に共通しているのは、使用する言葉や文体等における相違はあるにしても、彼らが当時の近代英語を意思疎通の手段として使用していることである。文体について言うと、Viola など主人公あるいはそれに類する人物は、対話の相手や話題によって散文を話すことはあるが、真剣で重要な場面ではブランク・ヴァースやカプレットで話す。Sir Toby や Sir Andrew をはじめとする脇筋の人物たちは歌などを除いて散文が中心で、まれに真面目な内容を伝えたり報告するような場合（5幕1場で Fabian が Olivia に Malvolio いじめの理由や経緯について説明する時など）、文体が散文からブランク・ヴァースに変わることがある。道化は歌を除いてほとんど散文を話すのが、言葉の点で他の人物よりも際だっているのは、当意即妙における機知に富んだ洒落や言葉遊びである。Viola が語るように、Feste は道化たるに相応しい才能に恵まれ、野生の鷹のように絶えず機を窺い、鋭く機会を捉えておどける。特に見所は、相手の言葉や内容に鋭く反応し、特定の言葉を捉えて、それに別の意味を込めたり、ひねりを加えて相手が予期しない言葉遊びで驚かせる場合である。Viola や公爵からチップをもらい、さらにチップを得るために道化が見せる巧妙な話術は見事である。

諺や格言（ラテン語のそれを含む）の知識については、公爵をはじめ上流階

級の人物たちも教養の一部としてかなりあると考えられるが、意外な形で自在に駆使する能力は Feste 独特のものであり、彼の言葉における特徴と言える。他方、道化は天下御免の無責任な存在として、劇中で嘘やはったりを言うことがあり (Quinapalus, 1.5.33のように歴史上存在しない人物が何か語ったかのよう言う場合など)、道化の言葉を全面的に信用することはできない。彼は自分のことを「言葉の遊び人」と Viola に説明しており、強引で大胆な論法やへりくつ (例えば、天国に行った兄の死を何時までも嘆き悲しむ Oliviaこそ阿呆であるとする論法) も Feste の特徴といえる。(この点では Sir Toby にもやや似たところはあるのであるが。) 賢明な道化は、劇世界と他の人物たちに対して相対的な距離を保ち、批評精神も豊かで絶えず冷静で客観的な視点で他者の言動を観察し、相手の言葉をもじったり、逆さまの視点で眺めたりする。公爵から調子を聞かれて、敵のおかげで良くなり、友のおかげで悪くなると逆説的な返事をするのも、他の人物には不慣れな逆の発想で柔軟な思考ができることの証である。最後に、Festeはこの劇において愛や失恋のテーマの歌をしばしば歌っていて、他の道化より歌の機会が多いことも触れるに値する。道化 Feste の言葉に関して、以上のことが大きな特徴として指摘できるように思われる。

注

1 David Wiles, *Shakespeare's Clown*, Cambridge University Press, 1987, p.100.

2 J. M. Lothian and T. W. Craik (ed.), *The Arden Shakespeare: Twelfth Night*, Methuen & Co Ltd., second edition, 1975. 以後、作品からの引用は全てこの版による。

3 Ibid., p.22 note では 'talents/talons' の地口は意図されていないように思われると述べているが、地口の可能性は否定できない。

4 Ibid., p.24 note.

5 Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, Methuen, 1968, p.224.

6 'Language, Theme, and Character in *Twelfth Night*' by Elizabeth M. Yearling (Harold Bloom (ed.), *Modern Critical Interpretation: William Shakespeare's Twelfth Night*, Chelsea House Publishers, 1987), p.78.

7 当時の英語について何が口語的だったのが明らかにすることは難しい。S. S. Hussey, *The Literary Language of Shakespeare*, Longman, second edition, 1992によると、当時散文は韻文より劣るものではなく、単に別種のもと考えられていたにすぎない (p.71)。また、高尚な生活では韻文、低俗な生活では散文といった明確な区別は、ごく初期の喜劇と後の 1, 2 回の例に現われているだけである (p.152)、また口語的言語が時々性格描写の 1 手段として使われていて、この劇では Toby, Andrew, Maria, Fabian の場面で、そのような使い方が

多いように思われる (pp.147-48) ということである。

8 1幕3場で Sir Andrew は自分が 'a great eater of beef' なので、そのことが自分の頭に良くないと言っている。

9 The Arden Shakespeare: *Twelfth Night*, op. cit., p.52 note.

10 Elizabeth M. Yearling, op. cit., pp.80-81.

11 Marjorie Garber, *Shakespeare After All*, Anchor Books, New York, 2005, p.513.

12 Alexander Schmidt (ed.), *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (Dover Publications Inc, New York, 1971)によると、'corrupter' は 'perverter, seducer' と説明されている。ここでは言葉を「悪用（誤用）する人、ゆがめたり品位を落とす人」といった意味であろうか。

13 Elizabeth M. Yearling, op. cit., p.80.

14 The Arden Shakespeare: *Twelfth Night*, *ibid.*, p.121 note. これによると、「こんにちは」という意味の良くないラテン語は恐らく Shakespeare の発明であり、筆記者又は植字工の間違いではないということである。

15 Cf. *ibid.*, p.121 note.

16 Bente A. Videbæk, *The Stage Clown in Shakespeare's Theatre*, Greenwood Press, 1996, p.95.

17 The Arden Shakespeare: *Twelfth Night*, op. cit., p.132 note.

18 Elizabeth M. Yearling, op. cit., p.80.